
ひごつばかんしょうにゅうもん
肥後鐔鑑賞入門
これであなたも鐔博士
打刀拵
細川三斎愛用「信長拵」を写したもの。「歌仙拵」とともに肥後拵の基本となる刀装です。
頭/山金地・山道に蛮文獣出彫　鐔/鉄地・高試透
柄/黒漆鮫皮・茶革巻巻　目貫/赤銅地・大輪牡丹彫
縁/錺革包　　笄/赤銅地・花車に秋草文高彫色絵
小柄/赤銅地・餅つき人物図高彫色絵
鞘/鮫皮巻・梅花皮塗　鐺/鉄地・泥試　下緒/茶革
本館蔵
江戸時代（17〜19世紀）
Mounting for a long sword(katana)　Edo period, 17-19th century
一口
拵の各部名称
打刀拵
肥後金工と八代
江戸時代の熊本では、刀剣の外装に用いる金具（刀装具という。鐔や縁頭、目貫などがある）にすぐれたものが制作され、林又七、平田彦三、西垣勘四郎（彦三の弟子）、志水仁兵衛（彦三の甥）を初代とする四つの流派を中心に、多くの職人が活躍しました。
肥後における金工の発展に大きな影響を与えたのが、寛永9年（1632）、八代城に入った細川忠興（三斎）です。三斎は、八代城下に職人たちを住まわせ、自分の好みに適う品々を作らせていました。
肥後金工の名工である彦三たちが、はじめ八代に住み、三斎の息のかかった人々であったことは、肥後金工の歴史にとって、ここ八代はたいへん重要な地の一つであるといえます。当館では、わが国の金工史上、高く評価される肥後金工の資料収集と紹介に努めています。
細川忠興（三斎）像（部分）
一幅　絹本著色　掛幅装　明治〜昭和時代（20世紀）
本館蔵
本像は、細川三斎（1563〜1645）没後の寛文10年（1670）に制作された肖像画（永青文庫所蔵）を近代になって写したものと考えられます。
晩年を八代城で過ごし、この地で没した三斎は、すぐれた武将であり、茶の湯をはじめ、和歌・能楽、絵画に通じた文化人でもありました。その美意識は、武具のデザインにも発揮されました。
本像の三斎は、柄と鞘に黒地に白く小さい斑文様を描いた拵を腰に差しています。これは鮫皮を巻いて黒漆塗にし、表面を研ぎ出して鮫皮の突起部分を白い粒状に残したもので、三斎愛用の「信長拵」や「歌仙拵」（いずれも永青文庫所蔵）の鞘も同じ技法で装飾されています。



肥後金工の代表的流派

林又七は、加藤氏に仕えた尾張出身の鉄炮鍛冶を父に持ち、のちに細川氏に仕え、地鉄の強さと透彫を旨とする尾張鐔や、洗練された図柄の京透鐔、布目象嵌の技法を用いた正阿弥鐔の影響を受け、よく鍛えられた地鉄に精緻な透彫と布目象嵌を得意としました。

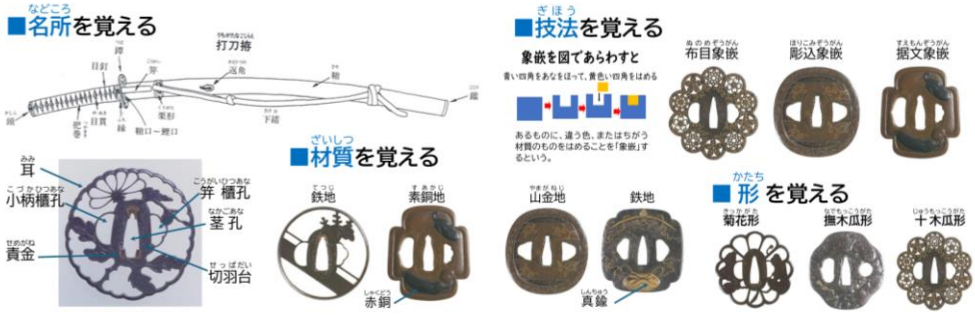
一方、寛永９年(1632)八代城に入った三斎が伴ってきた職人たちの中に平田彦三、弟子の西垣勘四郎、彦三の甥志水仁兵衛がおり、それぞれ個性豊かな鐔を制作し、肥後金工の興隆をもたらしました。





鑑賞ポイント

刀装具に限らず、日本の古美術を鑑賞するには、まず部分名称や材質を覚えることから始めるといいでしょう。現在でも、「元の鞘におさまる」「切羽詰まる」「身から出た錆」「鎬を削る」「付け焼刃」など、刀の名称に由来する言葉がたくさんあります。





鑑賞ポイント

鉄地がよく鍛えられ、古いものほど黒色が深く羊羹のような色になります。それほど古くない鐔の表面は、まだ錆がなじまずザラザラしたような感じが残っています。

いくつかの鐔を並べて見比べるとその違いがわかります。

通常、鉄は錆びやすく、放っておくと真っ赤に錆びてボロボロになります。鉄が空気中の酸素と結びついて酸化するためで、その色からして赤錆といわれます。

一方、鉄の表面を保護する働きのある黒い錆があります。風雨にさらされる公園や学校の鉄棒が何年も錆びないのは、この黒錆がついていることによります。赤錆に比べ、黒錆は不動態といって分子構造が安定しているので、腐食が進行しにくくなります。鉄鐔はこの黒錆を人工的につけたもの。その風合いが鑑賞上の大きなポイントになっています。

鐔に黒錆をつけるには、錆出液と呼ばれる溶液を塗って熱を加える工程を何度か繰り返した後、お茶の葉で煮て錆を黒く変色させます。錆の良しあしを決める錆出液の製造法は秘伝として鐔師の家に伝えられたらしく、江戸時代の史料に「**せんじ**（何かの煎じ液）、**白えんしょう**（煙硝＝硝酸カリウム）、**ねずみくそ**（鼠の糞）、**がにみそ**（蟹のはらわた）、**あいのうるか**（鮎のはらわた）」から作ると記されています。おそらく、これらに含まれる微量の塩酸や硝酸などが、鉄の黒錆化に影響を及ぼすことを、鐔師たちは長年の経験から学んでいったのでしょう。